

自らの思いに、忠実に。

土田英生

字数に限りもあるので気になった作品を中心に書かせてもらう。

山崎彬さん『ラスト・ナイト・エンド・ファースト・モーニング』が最初は気になっていた。読んでいて最後まで飽きなかったからだ。ただ、他の選考委員からの評価は決して高くなかった。私も書かれている内容と方法が釣り合っていないとは感じた。こうした題材を描くのであれば、思い切ってケレン味を排除し、オーソドックスに正面から書いてみていいのではないか。山崎さんにはその力もある。

最終的には横山拓也さんの『逢いにいくの、雨だけど』を大賞に推したが頑張り切れなかった自分もいた。台詞の細かなニュアンスや言葉の選び方は一級品で、横山節と呼べる武器を獲得している。その独自性に比べ、物語の設定の仕方には引っ掛かりを覚えてしまう。易きに流れてしまっているというか、これを書いておけばドラマになるという計算が透けて見えてしまっている気がする。十分な評価を得ている劇作家なのだから、焦ることなく書きたいことを書き切って欲しい。

山本正典さんの『しずかミラクル』。この人も独自の世界観を確立していて、正体不明な叙情性はとても魅力的だ。しかし細部のぞんざいさがあった。それぞれの登場人物が個々のモチベーションに基づいて動いていないせいか、乗り切れない印象を持った。

魔人ハンターミツルギさんの『ねこすもす』は冒頭が爆発的に面白かった。この不条理な世界がどこまで広がるのかと期待させられたが、途中から失速し、細かいギャグの羅列になっただけで終わった。

中川真一さん『Delete』、中村ケンシさん『かえりみちの木』については書き手の透明性というか、第三者的視点が気になった。とてもスマートには書いてあるのだが、題材となったものに対して作家がどのように入り込み、自分の身体のどこに痛みを感じているのかが伝わってこない。自分の中にも存在するであろう悪意にもっと目を向けてくれればと思った。

FOペレイラ宏一朗さんの『どこよりも遠く、どこでもあった場所。あるいは、どこよりも近く、なにもない。』はその点でとても好感を持った。自分の手触りを元に書かれていることが伝わってくる。ただ、やや技術が足りないというか、思い通りに進まない部分を安易なモノローグにしてしまうところなどがもったいなかった。

棚瀬美幸さんの『さらば、わがまち』は演劇の実験としては面白い所もあった。演じる役者個々の事情を舞台に載せフィクションと実際の間を行き来する。被差別者であると思なされる人たちを互いに加害者にもするという試みだと私は解釈したが、その設定の仕方にやや作者の傲慢さを感じてしまった。

田中浩之さんの『サッカバカナ』は作者自身の自意識が猛烈なエネルギーとなって作品を覆っている。そして一見、闇雲に書かれているようでいて、ところどころ見事なドラマを発

揮したりする。私は読みながら不覚にも泣いた。ただ、作者が投影され過ぎているために、自虐を描きながらも、そこに漂う優越意識が時折顔を出し、それが私には多少鼻についてしまった。

今回、私は初めて **OMS** 戯曲賞の選考に加わらせてもらったけれど、同じ関西を地盤にして戯曲を書いている身としては、選考することの苦しさも味わった。旧知である劇作家が多く、勝手なことを言いながら、その言葉はすぐさま自分に向かって刺さるからだ。

賞とは罪なものだ。私自身も随分と振り回されたし救われもした。だからこそうまく付き合っただけと願う。戯曲賞の選評としては似つかわしくない終わり方になるけれど、結果や他者からの言葉よりも、自らの思いに忠実でいて欲しい。私も自分に言い聞かせている。

それでも最後に……佳作の皆様おめでとうございました。